渡辺 紀子（わたなべ のりこ）

父の雷

サキノにとって今でも目をつぶると、はっきりと思い出す光景がある。それは真夏の日差しの中で輝く、真っ白な一面の花畑。サキノがよく通っていた畑の傍らに、沢山の百合の花が咲き乱れていたのだという。子ども心にその美しさが忘れられないのだろうと、こちらも束の間うっとりと想像を膨らませていた。ところが、サキノにとってそれは優雅に花を愛でた思い出の一コマではなかった。

こうした百合の群生地は、そうそうあちこちにあったわけではなく、この花もサキノたちの大切な食材の一つであった。この百合根掘りが、夏の労働の一つだった。根を掘るための先が少し曲がった棒のようなものを持たされ、あの暑い最中にひたすら掘り続ける。掘ったげんこつ位の根っこを、大きな籠で背負って帰る。

「百合根は今は高級食材のようだが、子めらの頃は毎年掘ってきて、煮て食ってたなぁ。今の百合根よりも粒が大きかったような気がする。うまいなぁとは思ったが、何しろ暑い中ていげぇねぇ（大変な）仕事や。したから、百合の花見て、きれいだなぁなんて悠長に見てなんていられなかったわい。花を飾って眺めるなんて思いつきもしなかったなぁ」。

また、アカザも沢山あり、よく採ってきて食べていたという。栗田家では、野辺の草花も食べることが最優先だった。

ところで、栗田家の稼ぎ頭は、ツガノとツトム、静賀の三人の姉たちだった。そこにサキノも負けず、あれこれと手伝う日々。でも、これまでサキノのすぐ上の兄、和三郎が一向に登場してこない。一体なぜなのだろう？答えは簡単だった。和三郎の存在は特別で、皆が可愛がるあまり誰も仕事を言いつけることはなかった。だから、栗田家のお坊ちゃんが、働く場面に登場することはなかったのだ。

「あんにゃ（兄）は、いっつもおとなしくて、つるっとゆで卵のようでほんにめごかったのや。みんなで田畑に行くときも、浅い川渡るようなとこでは必ずあんにゃのことだけは姉たちがおぶってやってた。着いてからも、あんにゃは一人で本なんど読んだりしてたっけなぁ。泣き虫でめそめそ泣いてばっかりいっから、学校で何か泣かされてっと“あんにゃのとこ泣かせんな！”って助けに行ったりしてた。汗水流して稼ぐことはオレたち、頭使うことはあんにゃだったのや。実際あんにゃは、学校の勉強も出来たからなぁ」。

大変な仕事の数々も、女性たちだけが経験した思い出。

ふと思う。同じ家庭の子にあって、思い出の中身が違いすぎはしないだろうか。でもこれもまた、サキノたちは当たり前にやっていたことだった。余計なことは考えず、ただそれぞれの役割をこなしていればきっと良くなる、と。家族が同じ思いで暮らしているから、悩みもなく穏やかな日常だった。

ある日のこと、何か兄に対し面白くないことがあったのだろう。サキノはそこにあった鍋の蓋を兄に向って投げてしまったという。元々壊れかけていた蓋だったから、少し凹んでしまった。その時だ。聞いたことのない大声で、父はサキノを叱りつけた。

「おなごの分際で、男にもの投げるとは何事だ！こぉだことは絶対してなんねぇからな！」と。初めて見る父の姿だった。生まれて初めて父が落とした雷。

父の雷は後にも先にもその一度だけだったという。大変なことをしでかしてしまった。きかんぼサキで有名で、男でも女でも、年上でも年下でも言いたいことは言ってきた。弱い者いじめする人には、敵討ちにも行っていた。でもこういうきかんぼは、してはいけないこと。静かであまり物言わぬ父が、これだけはと伝えてきたことだった。

サキノのきかんぼ哲学は、ここでまた一つルールが加わったのかもしれない。